



第111号
北海道ポーランド文化協会 会誌「ポーレ」
2024.1.5



午後のポエジアに参加して

林 祥史



街中の樹々がにわかに色づき始める 10 月 15 日、豊平館で〈午後のポエジア〉が開催されました。この日の札幌は日中 22 度まで気温が上がり、開場の 17 時ごろでも中島公園ではダウンコートや羽織る人は少ない様子でした。会場の豊平館には初めて入場したのですが、その錦のカーテンから窓外をのぞくとちょうど落陽の頃合いで、雲ひとつない空と街のビルは紫紺に染められて、なんて愛らしい午後なんだろう！ と開始前からすっかりワクワクしていました。



今年で12回目の〈午後のポエジア〉に私は初めて参加しました。まず北浦由花里さんによるショパンの演奏がありました。

私はフィンランドの大学院で研究していた頃ポーランド人の親友に会うため何度もポーランドを訪れましたが、毎回ショパンの偉大さを感じたものです。例えば空港の名にも冠していますし(空港にピアノが置いてありました)、ワルシャワのショパン博物館はいつ行っても満員で結局一度も入れませんでした。

その後、一部・二部あわせて9名による朗読が披露されました。お一人お一人大変素敵でしたが、中でもポーランドを代表する詩人シンボルスカさんの「終わり始まり」のポーランド語による朗読(ジェブカさん)が印象的でした。



ポーランド語は大学生の頃に初めて勉強したのですが、今なおあの独特な響きはマネできません。当たり前ですがポーランドに行く度に皆さんが話すポーランド語が魔法のようにお上手で、まるで空を飛ぶ魔女を見るかのように憧憬を抱いてしまいます。

私もソマイア・ラミシュさん作の「世界のどの地域も夜」を英語で朗読させてもらいました！ 当初ポ

ーランド語で朗読するものとはばかり思っておりましたが、英語でしたので正直ホッとしました(現在、私は高校で英語教員をしております)。



最後にポーランドの方からのパフォーマンスがあり、クイズをラファウ・ジェブカさん、そして映像でヴァイスワヴァ・シンボルスカ作「誰かが詩を愛する」のかわいらしい朗読を佐藤レミアさんが行いました。

私は学生時代のポーランドでの日々が今でもとても懐かしく、温かい思い出が溢れてきます。それゆえ遠い日本に戻って来た今でもまだつながりを持つことが幸せです。老若男女、様々な方たちが〈ポーランド〉と〈北海道〉という共通項をもとに集うこの機会に参加でき、10年ぶりに去年札幌に戻った自分としてもとても心温まる時間でした。

(はやし・よしひと、写真 尾形芳秀)





〈報告〉第109回例会 特別講演会（札幌エルプラザ 2023/11/5）

カティンの森のヤニナ～独ソ戦の闇に消えた女性飛行士 河出書房新社 2023.3

著者：小林文乃氏／特別ゲスト：富田武氏

トークショーを終えて(1) 小林 文乃

3月の刊行以降、私は東京と京都でトークショーを行い、札幌が三度目の機会でしたが、今回は会場がかつてない熱気に包まれ、私自身、稀有な体験をしたと感じています。特に、最後の質疑応答のレベルの高さには驚きましたし、皆さんの質問や感想から多くの気づきを得ることができました。

なぜ、これほどの熱量となったのか。近年のロシア情勢の緊迫感からでしょうか。プロニスワフ・ピウスツキをはじめとする、北海道とポーランドの関係の深さもあるのかもしれません。会が終わり、私が思うのは、北海道民ほどいまこの本を真剣に読んでくださる方たちはいないのではないかと、ということです。

取材をはじめた頃「なぜそんな大昔の事件に興味をもっているのか」と、たくさんの人に聞かれました。

誰も知らないし、覚えてもないよ、と。しかし、執筆の途中でウクライナ戦争が起こり「カティンの森事件」は再び脚光を浴びることとなったのです。

今回の富田先生のご講演は、その意味でもタイムリーで、衝撃的な内容でした。ウクライナ戦争以降、ロシア側は「カティンの森事件」の犯行をふたたび否定し、あれはナチスの仕業だったと言い出したそうです。

まるで旧ソ連時代に戻ってしまったかのような一連の動きに、戦慄を覚えたのは私だけではないはずです。北海道の方々も、カティンの森で死んだヤニナ・レヴァンドフスカの人生を、より近い存在として感じてくださったのではないのでしょうか。

この本は、たった一羽の鳥を追った、私の小さな旅の記録です。あの時代に、ひとりの女性が精いっぱい自分の人生を生きた——それを伝えるための私の旅は、まだ続きます。 (こばやし・あやの)

トークショーを終えて(2) 富田 武

11月5日午後に行われた北海道ポーランド文化協会主催のトークイベントで、なんで私が「カティンの森虐殺事件」で小林文乃さんのお相手を務めたかという、彼女の本の最初の読者として感想を自分のFBに発表しただけではありません。

事件を初めてソ連の責任と認めた1992年11月19日の政治局決定特別ファイルを『イズヴェスチヤ』で（滞在中のモスクワで購入して）読んでいて、ソ連による国際法違反の2万人を超えるポーランド将校らの虐殺自体に憤った体験があったからです。

またその後プーチンが首相期の2010年に花束を持って現地に追悼に赴いたのに、2014年の第1次ウクライナ危機の少し前あたりから、1940年にエストニアその他（1939年9月独ソ不可侵条約秘密協定に基づいて）ソ連に併合された国々で、国のナチからの解放に貢献したとして建てられたソ連軍兵士の像が次々と破壊、撤去されたことに危機感を強め「歴史修正主義」（元はドイツ歴史学会でナチ評価をめぐって用いられた用語）を乱用し「大祖国戦争」神聖化に努め、ウクライナ侵攻中の2023年4月には、ついに「虐殺はドイツ軍

の仕業」という正反対の立場（1943～92年）に、新しいアーカイブ文書が発見されたと称して戻ったのですが、それらは全てニュルンベルグ裁判の「継続裁判」（いわばBC級戦犯裁判）で論駁されたものでした。

ソ連による国際法違反の事案はこのように改作、捏造されたのですが、日本も無関係ではありません。1992年に「戦犯」から名誉回復された秋草俊（関東軍情報部長）、瀬島龍三（関東軍作戦主任参謀）、峯木十一郎（南樺太第88師団長）が昨年半ば（外務省プレス・リリースは本年1月）「戦犯に時効はない」という屁理屈で取り消され、しかもなぜこの三人か？の説明もありませんでした。

私は半世紀近くソ連研究をやってきたので、ある意味では「慣れている」のですが、「歴史的事実の政権の都合に合わせた歪曲」は絶対に許せません。

二人の講演後に小林さんと私に対する的確な質問がありましたが、二人のレジュメともども割愛します。

体調不良の（腰の痛みも含めて、写真を見ると井出さんのいう通り、昨年9月の『日ソ戦争』札幌講演に比して「生気のない表情をしている」）私のことを安藤さんと小林さんがサポートし気遣っていただいたことは感謝に絶えません。 (とみた・たけし)

トークショーを終えて(3) 園部 真幸

トークショーは参加者43人、うち一般参加者20人と、お二人の講師への関心の高さがうかがわれました。

小林さんはヤニナの取材で訪れたポーランド各地

やカティンの森（現ロシア領）などの写真を紹介しながら、ヤニナに対する思いを語られました。

富田さんは「カティンの森」事件の背景や経緯と、ウクライナ戦争を契機に進行するロシア国内の「歴史の書き換え」の動きについて怒りを交えて解説されました。

質疑応答でも熱のこもった発言が相次ぎ、たいへん充実した例会となりました。

その後の懇親会にも16人が参加し、初対面の方も多くなか大いに盛り上がりました。

質問用紙から

- ・ワイダ夫人が器用に箸で召し上がっていた食事は何でしょう？(ギョーザに見えましたが…)ポーランド軍団を一からつくり上げて蜂起するくだりを読んで『タラス・ブーリバ』を思い出しました。軍を作るというのがすごいと思います。
- ・旅をしながらたくさんの人とつながり、ヤニナの人物が浮かび上がる素晴らしい作品だと思います。是非テレビ番組にしてほしいです。企画はまだ生きていますか。
- ・本の209頁にドイツ軍による虐殺現場の発見後の米英など連合軍側の反応が書いてあります。では日本はこの事件に対しどう反応したのか、ご存知であればご教示ください。
- ・143～145頁にヤニナが住んでいた家に彼女の夫がたずねてきて引き続き妻の家を管理してほしいと管理人に頼んだが、その家にはドイツ人が入り込んで住み始めていたとあります。今年上映された『キャロル・オブ・ザ・ベル』(モルグレッツ=イサイエンコ監督)にも同様の場面があります。こういう事はよくあったのでしょうか。

アンケート用紙から

- ・購入した本(『カティンの森のヤニナ』)をゆっくり読みたいととても楽しみです。(富田さんの)質疑応答のお答えは熱が入り良かった。
- ・ロシアがウクライナの人々を虐殺している事実と重なり

り胸が痛くなった。小林さんと一緒に旅しながら事実を検証できて、まるで映画を見ているようでした。

- ・いまだに「カティン虐殺事件」をめぐるいろいろなことが判りまじ。不思議なことですね。『カティンの森』(ワイダ監督)は傑作でまた観ようと思います。
- ・(小林さまは)お顔もお声も美しく素敵な講演会でした。ポーランドの歴史はそんなに詳しくなかったのですが、今日を機会に関心を深めたいと思いました。
- ・富田先生、体調悪い中、貴重なお話と資料を公開頂きありがとうございます。先生の明瞭な発表がとても良かったです。ご自愛ください。
- ・知識がない状態で参加したが、小林さんの話がわかりやすく興味を持てたので本を購入した。
- ・富田先生のお話で歴史的背景や事実を知り、今のロシア情勢を改めて考える機会となった。
- ・暗くなりすぎないようにと心を配りながら、ポーランド各地を紹介する小林さんのお話はとても楽しかったです。各地にあるモニュメントの写真が拝見できたのは良かったです。
- ・このような女性がいたと初めて知りました。女性としてすばらしい人生だと思います。あこがれる女性です。
- ・私自身固定翼の操縦士を目指していた頃もあり、大いに興味をもって拝聴。悲惨な事件であるカティンの森をひとりの人生から読み解くと、事件に関し無知な私でも私の知識の中に蓄積されていくのを感じました。
- ・とても貴重なお話でした。世界中の一人一人の平和への意識がとても大切だと改めて思いました。
- ・小林さんのレジュメたくさん写真があつてとてもわかりやすかったです。最後に小林さんからの願いがよくまとめられていて理解しやすかったです。

『カティンの森のヤニナ』を読んで 園部真幸

どこも興味深く読んだが、とくに印象に残ったのは、198頁からの「眠れる森」の一節、クレムリン大会宮殿で『白鳥の湖』を鑑賞したときの記述だ。

「このように美しい芸術を生み出す国民が、同時に悪魔の所業を犯すというのは、一体どういうことなのだろう」

これは私が長く抱き続けている「最も理想的な社会を目指したはずのロシア革命が歴史上最悪と言っている国家をつくり出してしまったのはなぜか」という疑問にも重なる。

そして、私がこの著者の鋭い感性と表現力に感服したのは、次の一文に触れたときだった。終演後帰途につくために、6,000人が一斉に無言で駅に向かって進んでいくところの描写である。

「その瞬間、私は得もいわれぬ感覚に全身を包まれた。私という個が溶けて、ひとつの大きな流れの

一部になったような気がしたのだ。その流れはうねりとなって、ひとつの方向に進んでいく。永久に止まることない営み…」

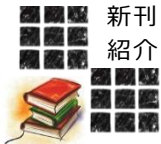


幾多の戦争や革命を経ても決して変わることはないロシアの民衆の姿。著者は一瞬の光景からそれを感じ取り、最良の言葉をもって読者に伝えている。そして、続ける。

「しかし、それは決して『個』の敗北ではないと、私は信じる。ひとりひとりに人生があり、自分だけの物語がある。そして、それらすべてに語るべき価値があると私は信じる。私の小さなコップでさえ、まだいっぱいになっていない」

ここに著者の表現者としての決意と、ヤニナの人生を追跡しようとした動機のすべてが凝縮されているように思えた。(そのべ・まさき)

祝 第9回(2023年度)シベリア抑留記録・文化賞 受賞!

新刊
紹介

命の嘆願書～モンゴル・シベリア抑留日本人の知られざる物語を追って

井手裕彦 (著) 集広舎 2023.8

第2次世界大戦中、侵攻してきたソ連軍の捕虜になったポーランド軍将校ら2万人以上が虐殺された「カティンの森事件」を知る人は多いが、1943年春、ドイツ軍が虐殺現場を発見して間もなく、6,500キロ以上離れた満洲で対ソ諜報に当たっていた関東軍憲兵の1人が事件に注目し、調べていた事実を知る人はほとんどいないだろう。

私は新聞記者生活最後の年の2020年1月、モンゴル外務省中央公文書館で、大戦後モンゴルに抑留された3人の日本人が同胞の命を守るためモンゴル政府に提出した嘆願書を見つけた。うち1人のウランバートル日本軍部隊指揮官、小林多美男(1914～89)=写真1940年頃 満洲にて=が当の人物である。彼の人生を追ううち、その事実に基づき、嘆願書を巡る人間ドラマを追跡した1,296頁の著書の中で一端を明らかにした。

小林がカティンの森事件を知ったのは牡丹江憲兵隊の曹長時代。ソ連が参戦してくるとすればいつなのか、情報収集が鍵になっていた。小林は特務機関や満鉄調査部、満洲国警察などからソ連の事情に通じた者を集めて調査を進め、この事件を把握した。

「カティンの森」に注目した小林多美男



驚いたのはここからの小林の行動である。当時、ソ連はドイツ軍の仕業だと主張。1945年11月から始まったニュルンベルク裁判で虐殺の責任をドイツに押し付けようとした。だが、小林は東欧諸国占領地での強制連行の実態からソ連の犯行だと見抜く。

そして日本の降伏後に満洲でカティンの森と同様の暴虐が起きる恐れを感じ取った。特に国境地帯に残る開拓団員への禍いを心配し、上官の憲兵隊長に後方へ早期避難させるよう意見具申した。隊長は「居留民を動かせば軍の動きもソ連に筒抜けになる。貴様、狂ったか」と怒り、小林を一晩、留置場に放り込み、転勤命令を出した。

ところが、左遷された満洲国南西部の熱河省でソ連軍の侵攻を目にした指揮官が小林の勇氣に目をつけ、ロシア語が堪能だった小林を停戦交渉に当たらせるため特命少佐に命じた。

憲兵や特務機関員は階級が高いほど、ソ連から

「戦犯」として追及を受ける。異例の“昇進”は身の危険を大きくする。だが、小林は運命に抗えず、停戦交渉からモンゴルへ移送される日本人梯団の指揮官、收容所の日本人部隊の指揮官と進んでいく。開拓団員を救おうとした人間性は変わらず、病弱者や高齢者を守るため体を張って当局との交渉の矢面に立った。

反動は大きく、何度も監獄に投獄された。1947年秋、モンゴルから日本人は一斉に帰還が許されたが、小林は「佐官」だとの理由でソ連に残留させられ、帰国は1950年1月になった。

帰国後、会社社長に落ち着いた小林がカティンの森事件を忘れなかったことも触れておきたい。移送中、自分の軍刀を渡したソ連軍中尉が後にその刀を返したいと申し出たことから、小林は1988年4月、東京の駐日ソ連大使館に招かれた。刀の返還が終わった後、小林は大使にこう訴えた。

「カティンの森事件について最近、ソ連、ポーランド両国の専門家が合同で実態調査を始めたと聞いていますが、未解決のシベリア抑留問題もゴルバチョフさんによって調査は可能ではないでしょうか」

ソ連に「戦犯」として連行された日本人抑留者の生死が機密のままであることを指していた。カティンの森事件に関してソ連は翌年、自国諜報機関の犯行と認め遺憾の意を表明したが、日本人「戦犯」抑留者は、小林の訴えも空しく、未だに死の真相がわからない者もいる――

シベリア抑留は日本人だけに降りかかった受難ではない。スターリン時代のソ連は占領した国で捕虜にした将兵や政治犯として捕えた市民を收容所に送り込んだ。ポーランドはその代表で、本書には日本人のまわりにポーランド人捕虜がいた場面も出てくる。約120万人の一般市民がロシアに強制連行された今のウクライナ侵攻にも通じる。

(井手裕彦、元読売新聞大阪本社論説委員・編集委員)

著者割(8,000円)で本書購入ご希望の方は、早めに090-2705-9901かidei5487@outlook.jpへ

井手裕彦著『命の嘆願書』 富田武 評

1295頁の大著を1週間以内で読んだ。同じ抑留を研究し数ヶ月前に「執筆中」と聞いた者として当然だが、期待に違わぬ「渾身の力作」だった(『読売』退社後3年で)。

1. まずタイトル「命の嘆願書」は、モンゴルに抑留された久保昇(元承德居留民団長)が民間人抑留の国際法違反を、小林多美男(元関東軍承德部隊長)、本木孝夫(病院軍医)が捕虜の待遇(死者が続出したので労働条件、給食など)改善をモンゴル政府当局に訴えたことを指す(計9通、144頁に表)。著者はうち2人の遺族から委任状を受け現物をウランバートルの公文書館で閲覧し、文書館スタッフや研究者から関連文献や情報を入手して(2020年1月)本書の中核部分を執筆した。

実は、日本人モンゴル抑留死亡者名簿は、1991年3月にゴムポスレン外相が国立公文書館から持参して日本政府に引き渡していた。4月にゴルバチョフ・ソ連大統領が旧ソ連地域全体の死亡者名簿を引き渡すよりも早かった。さらに2004年8月には、諜報庁所蔵の抑留者「個人登録簿」(大半が帰還者)も引き渡された。日本の厚生(厚労)省は、死亡者1597人がほぼ実数と見たのか、旧ソ連名簿の入手を急いだのか(と言っても受身的に待っていただけ)、モンゴル抑留者に関する文書には消極的だった。ようやく2019年に井手が「移送中の死亡記録」53名分があるはずだと指摘し、厚労省が入手した。上記の「嘆願書」等は、厚労省が「移送中死亡者」の確認にウランバートルに出張した際に存在を確認し、実際には井手が入手した(1264頁・表28)。

井手は、このモンゴル抑留関係文書を既存の回想記や「梅森モンゴル文庫」所蔵本(251頁)と照合しながら検討した。『読売』記者時代に蓄積してきたシベリア抑留の取材記事や資料(モスクワ支局長だった緒方賢一の貢献は大)、とくに抑留体験者や親族からの聞き取り記録を加えて「モンゴル・シベリア抑留日本人の知られざる物語」に3年余りで仕上げた。

2. モンゴル抑留といえば、長く体験者の「モンゴル会」のまとめ役だった春日行雄が知られている(『ウランバートルの灯見つめて50年』1988年)。1995年には『朝日新聞』主催でモンゴル公文書庁長官 Ch.ダシダワーらを招いて、シンポジウムが開かれた(『ドキュメント日本人のモンゴル抑留』)。その後『朝日』に寄贈された公文書コピーは、モンゴル史研究者の青木雅浩が所属の東京外国語大学に引き取った。シベリア抑留研究会は、日本に出張したダシダワー教授の報告「日本人のモンゴル抑留」を聞いた(2012年4月14日、モンゴル語・通訳付きで)。また、このロシア語文書を含む資料集は、青木本人が「近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター」(2013年)で紹介し、ボルジギ

ン・フスレ編『日本人のモンゴル抑留とその背景』(2016年、昭和女子大でシンポジウム／三元社、2017年)では、評者が上記資料集も利用して日本人抑留のロシア・モンゴル比較を試みた。フスレはモンゴル国立公文書館、外務省中央公文書館の所蔵文書を用い、日本人医師による死亡調書、捕虜・抑留者による(承德居留民団も含めた)「嘆願書」にいち早く言及した。

10年前に長勢了治は『シベリア抑留全史』を著したが、本書はそれに勝るとも劣らない「全史」である。しかし、篇別構成は学術書スタイル(章・節)をとらず、捕虜・抑留当事者、家族の「密度の濃い」物語として書かれた。学術書ならモンゴル公文書館訪問までの準備や公文書館の利用手続きなどは、註扱いするものだが、本文で記している。また、著者の取材は入念な準備をした上での丁寧なインタビューだが、厚労省から捕虜・抑留者の「個人登録簿」コピーを提供してもらい、そこに含まれない情報は、自身が戦友会誌を探し、国立公文書館や防衛研究所で調査するなど、若手研究者のお手本のような仕事ぶりである。

評者は常々、抑留研究はデスク・ワークではない、抑留跡地、抑留者による建築物、墓地ないし埋葬地等を訪ね、抑留者と接した現地住民、可能ならば地元研究者(郷土史家)から話を聴くフィールド・ワークを行なってこそ研究の名に値する、そして日本人抑留の場合は帰還者、死者なら遺族にインタビューすることが不可欠であると唱え、その通りやってきたが、この点は井出も同じだろう。

井手は、インタビューは親族に「もう過ぎたことなので」「私的なことですから」としばしば断られたと記している。評者も同じ経験をしてきた。彼はそれでも苦労しながらやり続けた動機を「明日の命もわからない極限状況にいた抑留者の『人間性』、遺・家族等の苦しみを伝えたかったからだという(エピローグ)。深く共感する。

3. 評者の本書を読んでの反省は、ソ連史研究者の陥りやすい錯覚、思い込み——抑留関係文書はモンゴルでもロシア語、モンゴル語で書かれていて、日本語文書はソ連における『日本新聞』くらいしかない——から、モンゴル公文書館に日本語の嘆願書や死亡調書が保存されているとは、長らく思いもしなかったことである。しかも、1990～2000年代にかけての日本の研究は、ロシア人研究者のアーカイヴ文書を用いた著作をなぞるようなものが多く、『捕虜体験記』や、それに含まれなかった個々の回想を軽視する傾向があった。本書は反対に、モンゴル公文書館に日本人の記録や当局への要望書などが多い点に着目し、それを請求し、駆使して本書を仕上げた。

本書はこのように、従来の抑留研究に対しても一石を投げ、水準を引き上げたと言ってよい。

(とみた・たけし、成蹊大学名誉教授)



シベリア抑留から、ポーランドの歴史へ 建部 奈津子

初めまして、新会員の札幌に住んでいる建部奈津子と申します。職業は歯科衛生士です。入会のきっかけは第109回例会「カティンの森のヤニナ」で富田武先生が来札された機会に、例会に参加したことでした。



富田武先生とのご縁

富田先生とは、私が運営しているボランティア団体「シベリア抑留体験を語る会 札幌」で、昨年先生が出版された『日ソ戦争』（みすず書房）の出版記念講演会を開催したご縁です。先生の「抑留研究会」にも ZOOM で何度か参加し、私が自費出版した児童書・シベリア抑留記『黒パンと交換した腕時計』（柏艸舎）に推薦文を書いて頂きました。このような交流があり、対面でお会いできる大変貴重な機会なので迷わず例会に参加させて頂きました。

私は演題の「カティンの森のヤニナ」については、恥ずかしいですが無知でした。ポーランドと言えばショパン、ワルシャワ蜂起、アウシュヴィッツ収容所くらいしか知りませんでした。小林文乃さんの講演を聴いて、ポーランドには記念碑や慰霊碑が多いことや、その存在意義の大きさを知りました。

吉田欽哉氏の功績

弊会でシベリア抑留体験者の語り部をされている利尻島在住の吉田欽哉氏(98)は、78年前シベリアに抑留中ソ連将校の命令で、自らの手で仲間の遺体を何十体も、命令されるがままにシベリアのツンドラ地帯の永久凍土に埋葬しました。その時まだ20歳の吉田氏は「必ず迎えに来るからな」と手を合せて約束しました。戦後70年ごろから語り部として北海道中心に活動し始めました。

世界規模のコロナ禍やロシアのウクライナ侵攻で、ロシアで遺骨収集ができなくなったため、ご自宅の近く、海を隔ててシベリアに一番近い利尻に「シベリア抑留者慰霊碑」を、戦友への供養と平和の想いを込めて、全国や海外の皆様からの温かいご寄付により、令和5(2023)年8月末に完成しました。この取り組みが評価され、このたび第9回シベリア抑留記録・文化賞で功労賞を受賞されました。

私は学校の授業では残念ながらシベリア抑留もポーランドのカティンの森事件も教わった記憶があ

りません。日本史や世界史の授業を単に年表を丸暗記する科目ではなく、どうしたら自分事として受け止めることができるのか、世界各地で今この瞬間にも尊い命が奪われていて紛争や軍事侵攻を阻止しなければならない状況下、自分の意見が言える人間になれるのか、若い世代が普通に意見を言える社会になるのかと危惧しています。

シベリア抑留記～黒パンと交換した腕時計

このような課題を踏まえて、私は令和4(2022)年初めに、易しく親しみやすい、読書が苦手な人にも読んでもらえるようイラストや解説を多くした児童書・シベリア抑留記『黒パンと交換した腕時計』を自費出版し、主人公の吉田さんのいる宗谷地方の全



小学校と全国の主要図書館へ寄贈しました。子どもや外国人でも読めるように漢字全てにフリガナをふり、文字も大きくしました。目や耳の不自由な方のためのサピエ図書館で音訳・点訳が公開されています。*

私たち大人が後世へ伝えなければならない負の遺産である戦争の話は、語り部も高齢化して激減し、このまま何もしなければ風化して歴史の闇に葬り去られてしまいます。

なぜ、過去の惨劇を繰り返さないよう、20世紀の歴史を活かせないのか？ いま世界各地で起きている軍事進攻がすぐ停戦できないのか？ 国際社会は解決できず、ただ黙って不安に駆られ何もできず歯がゆい思いをしなければならないのか？ 私たちにもできることは、知識の共有、SNS による情報発信などです。聞いたことを誰かに一言でも伝えれば、時間がかかっても1ミリずつでもこの社会は変わっていくのではないのでしょうか。

今回入会させて頂いたのをきっかけに、ポーランドのことをもっと学んで、世界の中の日本として、様々な角度から視野を広げていきたいです。

(たてべ・なつこ、シベリア抑留体験を語る会札幌会長)

* 購入(1,500円+送料)ご希望の方は「本希望」と明記し moon7250918@gmail.com へお願いします

お恥ずかしながら、

いい年になっても粗忽さは変わらない。ため息が出る。よく言えば好奇心旺盛、普通に言えば軽薄。これで七十年以上生きてこれたのだから、世の中はおおらかだ。

きっかけは映画サークルの会員交流会で池田光良さんと隣り合わせになったことから。年に百本の映画を見るといふから尊敬のまなざしで話をしてる内に、会誌の「ポーレ」を見せられた。「午後のポエジア」意味は解らないが豊平館の重厚で豪華な広間でピアノとギター演奏の写真が目に入る。「こりゃ面白そう」が躡き(つまづき)の第一歩。

二歩目が「どうしたらこの会に入れるんでしょう？」こともなげに池田さんが「私から紹介されたといってください」名刺を改めて見ると「博士(工学)」とある。こんな偉い人とは思わずに失礼したなと思ひながら

三田 剛己



「博士の紹介ならこんな俺でも大丈夫なんだろう」と安藤様に電話。驚くほどスムーズに入会が叶った。

そして総会の日。しまったと思わされたのがここから。居並ぶ人が大学教授に名誉教授・詩人協会の会長さん。一介の商人(あきんど)、住まいのリフォーム屋が入る処じゃなかったと臍(ほぞ)を噛んでも後の祭り。救いは皆さん、フレンドリーでショパンのノクターンがバックに。加えて我が師匠の檜部さんのお友達の氏間多伊子さんも役員さんのようで、美味しいウイスキーのおかげもあって一安心。

さてさて迷惑をかけずにお荷物にならぬようにと自戒して。皆様、どうぞ宜しくお引き立ての程、切にお願い申し上げます。(みた・たけみ)

ポーランドのことをもっと学びたい 齊藤 賢人

はじめまして。新会員の齊藤賢人です。東京都で生まれ、兵庫県と大阪府で育ち、愛知県豊橋市で働き、海外に出ました。そして、マレーシアとシンガポールで14年間働き、2012年に札幌に戻ってきました。現在は2つの事業に取り組んでいます。

まず、国内海外にいる帰国生専門の受験指導をオンラインで行っています。帰国生が自身の特性や経験で勝負する「自己PR型の入試」の受験指導が得意で、帰国生の願書やエッセイのネタ集めのために、世界各地を訪れています。

次に、家畜の餌となる飼料原料の取引、そして菜種油の原料となる植物のナタネや同じく油の原料となる荳胡麻や亜麻の取引もしています。家畜



の餌にできる農作物や有効な「残渣」は色々あるため、餌として使えそうなものを常に考えています。また、ナタネや亜麻などの植物油の原料は海外に多く、特にヨ

ーロッパ方面のものが安全で種類が多いため、調査として海外に行くことが多いです。

教育事業と飼料・油糧原料の仕事を兼ねて、今年の9月にオーストリアとチェコとポーランドに行きました。ウィーンとプラハはとても素晴らしかったのですが、私的にはポーランドは両国に勝っていました。ユニークな建築物、複雑な歴史、豊かなポエム、スープをはじめとした美味しい食事など、経験できたことすべてが感動と衝撃の連続で、わずか3日間で帰国しなければいけないのが本当に残念でした。

ポーランドのことをもっと学びたい、ポーランドの食品は秀逸でビジネスチャンスがある——と思ったので、ポーランドに関わろうと帰りの機内で決めました。札幌に戻ってすぐポーランドのコミュニティを探したところ、日本にはわずかに二つしかないコミュニティのひとつが札幌にあることを知り、ぜひとも北海道ポーランド文化協会に入会させていただきたいと思った次第です。

今回のポーランド訪問に備えて、貴協会ですっかりと学びたいと思います。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。(さいとう・まさと)

美味しい料理と子供が安心して遊べる場所 齊藤 美佳

はじめまして。この度、家族で入会させていただきました齊藤美佳と申します。入会の理由は今年の9月に初めて家族でポーランドへ行き、ポーランドが大好きになったため、この国のことをもっと知りたいと思ったからです。

滞在期間は3日間でしたが、歴史、町並み、食べ物、ポーランドの人たちの人柄に、私たち家族はすっかり魅了されました。特に、食べ物はどこで食べても美味しかったのが印象に残っています。

ホテルの朝食は今まで食べた中で最も感動した

内容でした。ピクルスや燻製、加工肉などが添加物の味と違って、しっかりと熟成された風味を感じ、食の安全レベルも非常に高いのではないかと感じました。また、ワルシャワ中央駅のショッピングモールには、とても美味しい定食屋さんがあり、どのお料理も、あまりの美味しさに感動しました。

子供を安心して遊ばせることができる環境や雰囲気があることも、とても素敵です。2歳の子供も連れて行ったのですが、公園だけでなく、子供が遊

べる場所がたくさんあり、彼は大満足でした。

帰国する飛行機の中で、「もっとポーランドを知りたいね」と夫婦で話し合い、検索をかけたところこちらの協会を見つけ、様々な活動をされていることを知りました。自分達が知らない北海道やアイヌについても大変興味があります。また、たくさんの書籍がHPで紹介されており、ポーランド協会の活動にワクワクしました。どうぞ、これからよろしくお願ひいたします。
(さいとう・みか)



菅原未栄詩集『櫻橋』発行:炎 2023.7

北海道の冬の海はいつだって、眠りと岩礁のせめぎ合いである。
菅原未栄詩集『櫻橋』を読み終えた胸中の第一声はこの言葉だった。



北の大地の魂

菅原氏の生まれ故郷である根室には、私の生まれた道南檜山の荒磯との共通点がある。それは漁場の喧騒と深夜の星の輝き、それらがこの地続きの北の大地では共通の言語であると知るには最適な詩集だと私には思えた。漁場を表象すると思われる詩篇「いろけ譚」にはこうある。

あの日 浜の岩作さんは自慢のピカピカクラウンで／颯爽と浜からやって来た

檜山の人たちもかつて高級車と言えばクラウンであった。そして、威勢の良い男ほどクラウンをピカピカにし潮騒を切り裂きながら海岸線を突っ切っていく。菅原氏の根室にはその時代を表す豪華さや賑わいを感じられた。かつての漁場はそうだったのだ。

幻のオホーツク共和国

また詩篇「空耳」ではオホーツク共和国の存在を知らされる。私の道南では誰もが知るように箱館共和国がかつて存在した。官軍に追われ、独立を夢見た榎本武揚と土方歳三で有名だが、菅原氏の「空耳」では「——ほんかわさああん／空からか海からか加工場からか船からか／人っこひとりいない静寂から響いてくる」や「ねこのニヤニヤ ねこのニマニマ／あれはチェシャ猫」など女性ならではの視点で描かれたオホーツク共和国が表出する。

「幻の」とあるように箱館同様の独立を目指す動きが道南だけではなく、オホーツク圏にも存在したのではないかと推測が「お嫁に行くので根室離れるってわかってたのかい」という行から感じられる。北海道共通かもしれないが住み慣れた町を離れ、新天地を求める心はこの共和国建設の精神がしら

ず道民の深奥に眠っているためと指し示すかのような一篇である。

吉田一穂の心

また吉田一穂にも触れている詩篇「かいやぐら」は秀逸と言える。木古内の漁村生まれの一穂の詩篇「ひばりはそらに」を取り上げ、自らの心に一穂が棲み付いたかのように詩篇は始まる。伊達市などで観られるシャーマンの精神にも通じるこの作品は、北海道人であることを決定づける一篇ではないかとさえ感じてしまう。

ここでは胆振圏同様「ニムオロ」や「コイ・トウイエ」といったアイヌ語が詩篇に使われ、先住民への愛にも言及する。そして、隣国ロシアとの対話が必要とされる「根室の沖の彼方 寂しくたたずむ “国後島”」で、現代のウクライナ戦争に至るまでを包括するような世界観がこの詩篇では描かれている。菅原氏自身の詩人としての大器と成熟さを表出させるこの一篇は、まさに吉田一穂の心を自らに宿らせたと言っても過言ではない、道民詩人としての尊厳が描かれていると感じられた。

いずれにしても根室である。その根室を通じて母性や恋をフローさせつつ、北海道全体を見渡すその視点で描かれたこの詩集『櫻橋』は、多くの人に読まれるべき詩集と感じられた。

最後にこの詩集の巻末詩の最終連を抜粋して終わりたいと思う。ここに菅原氏の決意が示されている。北海道民の魂である。

ここだ ここに決めた／坊主頭は 昆布で隠し／海務に紛れて『たま迎え』／きつと 生き抜いてみせる／ただ独り この紅煙で

(小篠真琴、詩人、今金町)

アートマイムから、詩の朗読へ 木内 ゆか

前の号ではポーランド発の身体表現「アートマイム」のことを書かせていただきました

フランス発のパントマイムがコミカルな演技で笑わせてくれるエンターテインメントであるのとは対照的に、アートマイムの表現するものは「人間」又は「生命」といえるかもしれません。小道具も、場合によっては効果音すらない舞台に立ち、あらゆるニュアンスや質感を、インナーマッスルを使って表現していきます。たとえば暗闇の中で何かに触れて「ハッ」と息を飲むとか、正体が分かって恐れが融けていくときの安堵感等々…。演者と観客は呼吸を通してあらゆる感情を共有します。このとき演者は感情の媒体にすぎず、自分の個性は隠します。私たちレッスン生は「身体を消す」よう指導されます。

師匠の JIDAI 氏(日本人男性)の舞台を観ていると「自分の夢」を見ているような感覚になります。眠くなる人がとても多いのは、あまりに深く潜在意識に入ってくるからかもしれません。

私自身はアートマイムを学びながら、今は自作詩の朗読をしています。小さな会場に一人で立ち、マイクも音楽も使わずに、詩を朗読しはじめて一年になります。朗読ではあるのですが、私にとってはアートマイムと同様、聲で「人間」や「生命」を表現することを目指しています。

2023年5月に北海道詩人協会賞を頂いた詩集『ああ そうやって私たちは 日ごと夜ごと 千年先まで』には恋愛詩が多く、舞台では様々な女性を演じています。

始めた頃は大きな聲ではっきり読むことだけに専念しておりましたが、次第に欲が出てきて動作や声音でキャラクターを演じるようになりました。回を重ねるごとに文章を暗記し「ひとり芝居を観ているよう」と言ってくれる心優しい方々も…。しかし今思うとその頃の朗読は私の解釈と個性を前面に出した「大人の学芸会」であり、微笑ましくも痛々しいものだったと赤面するのです。

どうしたら師匠のように、潜在意識に深く届く「異次元」を提供できるだろうか。

空間に詩だけが立ち上がる
詩人はそこにはいない

答えはまだ見つかっていません。はるかに遠い道のりなのでしょうが、先日10回目のパフォーマンスのときに、会場である東京の駒込平和教会の室内と、自分の身体が楽器のように共鳴しうることを発見しました。



自分の書いた詩を信じて手放すこと

いつもの焦りはなく、もう一人の自分が室内のすべてを冷静に把握しているのです。腹式呼吸で広がる私の腹腔は、そのままクリーム色の室内で、調度品やお客様を当たり前のように愛おしく包んでいました。セリフの強弱や感情のニュアンスも、詩が人格と意志を持ったように自在にコントロールしていたので、私はほとんど何もすることがありませんでした。

私にとって朗読は親子離れの儀式のようなものなのかもしれません。咽喉から出て羽ばたいていく言葉たちをただ見つめていました。



『ああ そうやって私たちは…』より

スプーン

とても近づいた時にだけ
正しく映すことができます
少しでも離れたら 世界は転覆してしまう
スプーンです 蕾です
ステンレスの 雫です
ポタージュスープを一匙掬って
ピンク色の口腔に羞(つつが)なく注ぎたい
彼らの胸を温めたい 唯それだけの
スプーンです なめらかなステンレスは
一本あしの祈りです…

(きうち・ゆか、横浜市)

映画『戦場のピアニスト』 4K デジタルリマスター版 札幌・シアターキノ、2024年1月6日～ ロードショー



名匠 ロマン・ポランスキー監督作品

フルシャワ・ゲットー蜂起から80年/不朽の名作が、4Kの美しい映像で甦る
原題: The Pianist | 2002年 | フランス・ポーランド・ドイツ・イギリス・アメリカ
英語・ドイツ語・ロシア語 | 150分

シンボルスカ生誕百年の深い感慨と感謝 長屋のり子



シンボルスカ生誕百年(1923-2012)の活字が詩誌に静かに刻まれている。生誕百年の詩人達、敬愛やまない加島祥造(1923-2015)、田村隆一(1923-98)、北村太郎(1922-92)の「荒地」のメンバー、そして牧羊子(1923-2000)も並んでいて、やるせない感傷が胸奥を走った。自分と彼等の年齢の違いのあまりないことにもあらためて驚嘆する。

ポーランドでは十年前と同じように、あのロングランを続けたシンボルスカ回顧展が古都クラクフの国立美術館でひっそりと開催されたのだろうか？ その展覧会の追想を『シンボルスカの引き出し』(2017)の中でつかだみちこさんがこう書いている。——その昔、最後の恋人、作家のコルネル・フィリポヴィチと早朝からどこか地方の蚤の市に出掛けて集めたキッチン骨董品や、美しいアクセサリ、ヴェネチアングラスの箱、グラスの集積が縦長のガラスケースの中に積みあげられ燦然と光を放っている。復活祭やクリスマスなど人々の集まりの日に自ら「あみだくじ」を作り、それらを惜しげなく親しい人々にプレゼントしつづけた——私はこの逸話が愛しくてならない。

シンボルスカの代表作「可能性」の中の二十項目ほどの好きなものを並べあげた最後に、そのまさに「引き出しが好き」というフレーズがある。私の愛してやまない詩だ。引き出しの奥には可能性が眠っている。ドストエフスキーよりディケンズを好む。人類を愛する私より人間好きな自分が好き——彼女の詩の此処其処に相似型の私が潜んでいる。その古い荘重な家具の引き出しを掴みだすシンボルスカの繊細優雅な指先が鮮明に眼前に浮かぶ。少し逸脱するが、この列挙法とでも呼ぼうか、その描き方は独自のもので、語句の選択に関しては緻密で、意識的に実験的である。「奇蹟の青空市」「覚え書き」「統計の説明」「一覧表」等(列挙)秀逸詩群、枚挙にいとまない。

日本詩壇では、重鎮支倉隆子(1940-)詩に昨今、この列挙詩法を多く散見する。支倉詩はさらに大胆に痛快に無作為にそれを駆使して鮮やかだ。

支倉隆子を引き合いに出したからには、『倚りかからず』『わたしが一番きれいだったとき』の日本のシンボルスカと呼ばれる茨木のり子(1926-2006)もあげざるまい。詩の核に唯物論ともいふべき自分の思考方法を終生貫いて揺るがなかったという魂の強靱さも全き共通項、そして、ヨーロッパ詩

壇のグレタ・ガルボと称されたその凜然の美貌は茨木のり子にあって毅然、比肩する。詩に屈強無比な精神性を潜めるといふ点でも確かに類似してといえるかもしれない。その諧謔、そしてシニカル！

支倉、茨木、シンボルスカの詩の醸し出す芳香は、一般的な香水のそれではなく、針葉樹の傷みの中から醸成される樹液、バルサムのそれだ。奔放でいて、しっかりと重力を持つ発想。その引力の強靱。生誕100年のシンボルスカ、97年の茨木のり子、支倉隆子冴々と現役83年の詩人達があらためて眩しい。親しい慕わしい眩暈が私にやってくる。シンボルスカは「一覧表」の中でこんな風に問う。



何が本当だったのか／かろうじて本当のように見えていたのは何だったのか／星の世界の、そして星の下の／入場券の他に退場券も必要な／この劇場の観客席で。〈…〉どうして私は悪いことを／いいことと取り違えたのか／間違いを繰り返さないためには／何が必要なのか。

これらの詩行こそは私の胸の中の疑問符と寸分違わない。まさに私の逡巡だ。この読者との深い共時性こそが、卓越の詩人達の変らないインパクトだ。アイロニカルでいながら優しく透徹した詩人の、このひらける見晴しのよさに、私達はぐいぐいとものごとの深い意味へと導かれていく。——私のとても好きな詩「とてもふしぎな三つのことば」では、

「未来」と言うのと／それはもう過去になっている。／「静けさ」と言うのと／静けさを壊してしまふ。／「無」と言うのと／無に収まらない何かをわたしは作り出す。

このシンボルスカの美しい逆説。完璧な成熟。その生誕百年に嬉々として瞑目。(ながや・のりこ)



ドキュメンタリー映画上映『Ainu ひと』 監督からの報告&館長の講演 2024.5~6月頃

テーマ「プロニスワフ・ピウスツキのいま～ポーランド、英国におけるアイヌ文化への関心」

- 〈ビデオレター〉 溝口尚美監督「ワルシャワ上映会の報告」
- ドキュメンタリー映画『Ainu ひと』上映
- 〈対面による講演〉「ジャパン・ハウス ロンドンにおけるアイヌ文化展」

長田佳宏(平取町立二風谷アイヌ文化博物館館長)

日本に於けるショパンの受容について (2) 川染 雅嗣



本稿では澤田柳吉というピアニストに絞ってその活動について考えてみたい

日本最初のショパン弾き・澤田柳吉

澤田柳吉(以下澤田)は明治19(1886)年3月19日に東京・神田に生まれている。父親は歯医者を生業としていた。澤田家は他に土地も所有しており、比較的裕福な資産家の次男として不自由のない少年時代を送っていたようだ。ピアノにいつ目覚めたかについて詳細は分からないが、ともかく明治35(1902)年に東京音楽学校の分教場の選科に入学している。そして翌年同校本科器楽部1年に進学、同期には将来を嘱望されながらのちにウィーンで自殺する久野久子や、日本の音楽教育界の重鎮となる小松耕輔がいる。在学中から積極的に演奏活動を行い、特にショパンの演奏で秀でたものがあり、評論家からも高く評価されるようになった。所謂ショパン弾きとして一定の名声を得るようになっていったのである。しかし、彼の音楽家としての活動をざっと見渡してみると、一概にショパン弾きというレッテルを貼れないほどに、その活動は多岐に亘っているのである。

まずショパン弾きとしては明治45(1912)年に日本人で初めてソロリサイタルを開催し、しかもオール・ショパンというプログラムで臨んでいる。これは快挙とも言うべき出来事である。日本人なら誰でも知っている〈幻想即興曲 嬰ハ短調 Op.66〉を得意としており、日本での初演者とも言われている。

また、明治42年から1年間、台湾総督府国語学校で音楽の教師として勤務している。この人事には音楽取調掛設立に尽力した伊澤修二が関わっているらしい。

大正4年(1915)には、日本からサンフランシスコに向かう客船の船上楽士として4度乗船し、ほかのメンバーとともに演奏している。ここではクラシック以外の音楽との出会いがあったであろう。また大正7(1918)年には浅草オペラの世界とも関わっているのである。

澤田の活動で特筆すべきは〈調和楽〉という新し

いジャンルを創出し、作曲・演奏活動を行なっている点であろう。これは、既存の邦楽作品のメロディーに西洋音楽の和声を応用したハーモニーを施した音楽である。澤田は学生時代からこのジャンルに取り組んでいた。卒業後もそれを続けて多くの作品の楽譜が出版され、レコードにも吹き込まれている。現在は音源をリマスター編集したCDでそれらを聴くことが出来る。このジャンルは当時既に賛否両論あり酷評する評論家もいたが、西洋人には案外好評であったらしく、楽譜を買って求めて故郷に持ち帰る人もいたらしい。

関東大震災後は大阪に移り住み、大阪市立盲学校に職を得る。昭和6(1931)年には専任教員となっている。その地で昭和11(1936)年9月16日に脳溢血のため没している。50年という短い人生ではあるが、黎明期の日本音楽界を駆け抜けた才人であったと言えるだろう。

澤田の人生を別の角度から見ると、それは今もこの業界に多く存在するフリーランスの音楽家の生き様に重なるところがある。穿った見方だが、大阪以前は専任職を持たなかった澤田は、収入になることなら何でも引き受けていたのではなかろうか。それが結果として多様な活動に繋がっていったと感じるのは私だけだろうか。ただ、澤田はショパン弾きと一言で語ることが出来ないほど進取の気性に富んだ、当時稀に見るマルチタレントであったことは誰も否定し得ないのである。

(謝辞)本稿(1)(2)は以下に多くを負っています:多田純一著①『日本人とショパン〜洋楽導入期のピアノ音楽』アルテスパブリッシング、2014=右図= ②『澤田柳吉〜日本初のショパン弾き』春秋社、2023=左図=——記して感謝申し上げます。



(かわそめ・まさし、昭和音楽大学特任教授)

講演会「カティンの森事件とシベリア抑留」 2024.5月または6月企画!



■井手裕彦■
『命の嘆願書』より
〜カティンの森事件と小林多美男氏の生涯

「カティンの森事件」&「シベリア抑留」関連をテーマに
新会員ふたりによる講演会

本号 4, 6 巻をご参照

■建部奈津子■
シベリア抑留体験記から



「ポーランドダンスの祭典 2023 in 北海道」について 今井 裕美

9月23～24日札幌市南区真駒内の北海道青少年会館 Compass で「ポーランドダンスの祭典 2023 in 北海道」(参加者約150名)が開催されました。ポーランドの民族舞踊に特化して踊る2日間は、日本のフォークダンス(民族舞踊)界においても稀有な催しでした。



(左から)今井裕美・秀樹(PFAJ 事務局長) ダンス風景

(左から)門間巖(PFAJ 会長)、安藤厚(博文協会長)、佐々木康夫(北海道ポーランド民族舞踊研究会 Do 代表)

「ポーランドの民族舞踊」という言葉から皆さまが思い描かれるのはどのような映像でしょうか? よくご存じのポーランド生まれのショパンは、数多くのポロネーズや、マズルカを作曲しています。その作品の根底に流れる哀愁を帯びたメロディー、時に迸る激情、誇り高い旋律、いずれもショパンが20歳まで過ごした故郷の民族音楽や母国への愛が込められています。

ポーランド各地には現在に至るまでそれぞれの民族舞踊が伝わっており、フェスティバルでは地元の舞踊団などが民族衣装に身を包み、生演奏で楽しく踊っています。その一方で3度の亡国を経験したポーランドは、国の誇りをかけて自国の民族舞踊5種類を「ナショナルダンス」と位置づけ、芸術の域まで高め踊り継いでいます。「ポロネーズ」「クヤヴィアク」「マズール」「オベレック」「クラコヴィアク」です。「クラコヴィアク」以外は3/4拍子ですが、リズムの緩急やアクセントが微妙に異なり、踊り手は練習を強いられます。しかしその奥深さ故に日本人の私達でも魅力を感じ、踊り続けています。

日本・ポーランド民族舞踊友好協会 PFAJ

「日本・ポーランド民族舞踊友好協会」は2014年に、当時のポーランド広報文化センター所長ミロスワフ・ブワシチャック氏のお力添えで発足しました。

それまで個々にポーランドダンスを踊る活動をしてきた団体が集い、踊りを介して親交を深め、さらに活動の枠を拡げ、ポーランドとの文化交流や民族舞踊のワークショップなどが可能になるよう、2021年8月にスタニスワフ・ハディナ記念ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」とパートナーシップ契約を結ぶに至りました。

現在、協会には北海道から九州まで、ポーランドダンスを踊る12団体・愛好者が所属しています。年に一度、各地持ち回りでポーランドダンスを踊るイベント「ポーランドダンスの祭典」を開催し、ポーランドの踊りを楽しんでいます。2019年よりシロンスク舞踊団との連携も進み、毎年舞踊団のコンテンポラリーダンスの上映会、公演、ワークショップを開催しています。本年6月に初めてポーランドダンスを愛する20代の若者2人をシロンスク舞踊団の70周年記念式典とオリジナルワークショップに派遣することができ、協会としても大きな一歩となりました。

心を魅了する民族音楽、多彩な民族衣装、そして踊りというコミュニケーションは、時代を越えて私達を捉え続けます。

今回いただいた北海道ポーランド文化協会の皆さまとご縁が今後とも続きますようお願いしております。

(いまい・ひろみ、PFAJ 事務局、京都府宇治市)

ワルシャワ蜂起 80 周年記念事業として、広島、大阪に次いで、札幌で「展覧会」この夏に開催決定!



ワルシャワ蜂起博物館
 アダム・ミンキエヴィチ・インスティチュート 主催
 「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」

会場：札幌市資料館(旧札幌控訴院、大通西13)
 会期：2024年8月(詳細はPOLE次号をご参照)

首都の崩壊に特別な焦点を当て、占領下ワルシャワの姿をありありと描写。第二次世界大戦時のワルシャワとポーランドの運命と、原爆により甚大な被害を受けた広島との関連が提示され、廃墟から立ち上がり今日では近代的でダイナミックな大都市となったワルシャワの復興もキーワード

第37回定例総会議事録

(議長 村田 雄穂)

2023年10月15日(日)札幌市・豊平館において第37回定例総会を開催し(出席者19人・委任状41通[会員数93人の1/3超=32人])、以下の議案について審議し、各議案とも過半数の賛成を得て議決されました。

[第1号議案]2023年度(2022.9-2023.8)活動報告について(ラファウ・ジェブカ)

1.《第36回定例総会&懇親会》豊平館、2022.10.30(日)総会15:00～(出席者20人、委任状49通、会員数99人)、懇親会17:00～(参加者44人、うちポーランド人・家族20人)

2.例会等

(1)《第102回例会》新作パフォーマンス「女は語る Mówi ONNA」by アマレヤ劇団&メノコモシモシ / 動画「アイヌとカムイのためのレクイエム Requiem dla Ajnu i Kamui」2021、札幌文化芸術劇場3F クリエイティブスタジオ、2022.11.23(水)10:00～11:30(参加者約80人)

(2)《第103回例会》ポーランドのロマン主義とは何か～ポーランド・アイヌ『祖霊祭』夜明け前/シンヌラッパ・クンネニサツ、2022.11.28(月)①13:30～15:00、かでの2・7◆お話「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』について」ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ◆講演「ポーランドのロマン主義～ミツキューヴィチ作『祖霊祭』の役割と意義」関口時正◆朗読『祖霊祭』第2部より:林家とんでん平②16:30～18:00、シアターZOO、劇的朗読「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』夜明け前/シンヌラッパ・クンネニサツ Dziady polsko-ajnujskie / Przedświt - sinnurappa-kunne nisat」作・芸術監督: J・ロドヴィッチ、出演:アイヌ女性会議メノコモシモシ&アマレヤ劇団(参加者①約40人、②約60人、両方に参加約20人)

(3)ポーランド名作映画ビデオ鑑賞&交流会2023、札幌エルプラザ①《第104回例会》『エロイカ Eroica』1958 アンジェイ・ムンク Andrzej Munk 監督、2.20(月)18:30～(参加者:会員11人、一般12人)②《第106回例会》『イマジネ Imagine』2012 アンジェイ・ヤキモフスキ Andrzej Jakimowski 監督、3.13(月)18:30～(参加者:会員11人、一般12人)

(4)《第105回例会》(株式会社三菱 UFJ 銀行の寄付による)特別講演会「プロニスワフ・ピウスツキの遺したもの」①「プロニスワフ・ピウスツキが集めたアイヌの衣類」佐々木史郎②「ピウスツキが来たころと、その後の樺太アイヌの歩み」田村将人、札幌エルプラザ、2023.3.4(土)18:30～21:00(参加者70人超、うち会員14人)報告書 POLE110-2

(5)《第107回例会》創立35周年記念演奏会～ショパンと華麗なるポーランド音楽、札幌コンサートホール Kitara、2023.6.3(土)18:30～(演奏者15人、挨拶・お話3人、来場者287人)

3.(1)会誌 POLE no.107(2022.9.1)、no.108(2023.1.20)、no.109(5.1)発行

(2)紙芝居「プロニシ・ピウスツキ」ポーランド語/日本語版の印刷と寄贈

4.運営委員会

①2022.9.26 ②2023.3.20 ③7.17

5.後援事業等

(1)〈後援〉川染雅嗣ピアノリサイタル in アルテピアッツァ美唄 Vol.III 彫刻を聴く～石の声に耳を傾ける、共演:柘原享子、2022.9.10(土)

(2)〈後援〉鈴木飛鳥・坂田朋優ピアノデュオリサイタル、ザ・ルーテルホール、2022.10.16(日)

(3)〈後援〉徳田貴子ミニピアノリサイタル～ガーシュウインの歌による超絶技巧練習曲を中心に Somebody Loves Me、札幌文化芸術交流センターSCARTS コート、2022.11.28(月)

(4)〈協力〉プロニスワフ・ピウスツキ105回忌(献花、参加:安藤厚、氏間多伊子、尾形芳秀)、ウポポイ(民族共生象徴空間)記念像前、2023.5.17(水)

(5)〈後援〉井上あい子・高橋可奈子ジョイントリサイタル、ザ・ルーテルホール、2023.8.20(日)

6.会員動向(2023年度)

入会3人、退会5人、逝去2人、
会員数94人(2023.9.1現在)

[第2号議案]2023年度収支決算報告および会計監査報告について(園部真幸・稲川和幸・嵩文彦)別紙参照

[第3号議案]2024年度(2023.9-2024.8)役員等(案)について(安藤厚)

(会則第6条に基づく役員)

新任

会 長:安藤厚

副会長:塚本智宏

運営委員:安藤むつみ、池田光良、氏間多伊子、小笠原正明、柏木由美子、北浦由花里、熊谷敬子、坂田朋優、霜田英麿、園部真幸、中島洋、アグニェシュカ・ボヒワ、村田讓

事務局長:ラファウ・ジェブカ

監査委員:稲川和幸、嵩文彦

(会則第15条に基づく事務局、委員会等)

事務局:(事務局長)ラファウ・ジェブカ

(副事務局長・会計)園部真幸

(催物)氏間多伊子、(同)熊谷敬子

編集委員会:安藤厚、池田光良、氏間多伊子、熊谷敬子

広報委員会:安藤厚

(会則第16条に基づく東京事務所)

(所長)霜田英麿、(副所長)熊倉ハリーナ

[第4号議案]2024年度活動計画について(ラファウ・ジェブカ)

POLE111 (2024.1)

- 1.《第37回定例総会》&《第108回例会》第12回朗読会「午後のポエジア」豊平館、2023.10.15(日)総会1F下の広間、15:30～、午後のポエジア2F 広間、17:30～
- 2.例会等
 - (1)《第109回例会》特別講演会(トークショー)『カティンの森のヤニナ～独ソ戦の闇に消えた女性飛行士』(河出書房新社2023.3)～著者:小林文乃氏を迎えて/特別ゲスト:富田武成蹊大学名誉教授、札幌エルプラザ4F 中研修室、2023.11.5(日)14:00～16:00
 - (2)〈後援〉日本ショパン協会北海道支部創立50周年記念コンサート～ショパンに魅せられて、札幌コンサートホール Kitara 小ホール、2024.1.28(日)14:30～
 - (3)DVD「Ainu | ひと」鑑賞会 2024.3以降

- (4)ワルシャワ蜂起博物館展覧会「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」(広島、2023.11.15～2024.2.5)札幌、2024.8
- (5)午後のポエジア、名画ビデオ鑑賞会、ポーランドサロン等
- (6)その他:後援・協力依頼には随時対応
- 3.会誌 POLE no.110 & 別冊(2023.9.1)、no.111(2024.1)、no.112(2024.5)発行
- 4.運営委員会:3～4回程度
- 5.オンライン広報(HP、Facebook 等)の充実
[第5号議案]2024年度予算(案)について(園部真幸)別紙参照
[第6号議案]その他

2023年度 収支決算書 (自2022年9月1日～至2023年8月31日)

○一般会計

【収入の部】

(単位:円)

	決算	予算	増減	備考
会費	256,000	249,000	7,000	納入率3千円×98人×87%
寄付金	64,860	50,000	14,860	
雑収入	4,159	4	4,155	特) ポーランド・アイヌ祖霊祭より(4,154)、貯金利子(5)
小計	325,019	299,004	26,015	
前年度繰越金	588,316	588,316	0	
合計	913,335	887,320	26,015	

【支出の部】

(単位:円)

	決算	予算	増減	備考
事業費	123,429	130,000	△ 6,571	36総会69,391、37総会17,700 例会[104]8,628、[105]2,744、[106]14,106、 [108]1,870、[109]7,800、特) MUFG事業へ(1,190)
連絡費	107,201	80,000	27,201	郵送:36総会13,020、POLE 82,225、チラシ1,260、37総会 6,300、その他4,396
編集費	143,943	119,000	24,943	印刷:POLE [107]26,181、[108]16,246、[109]21,670、 [110]19,107、チラシ外8,461、特) 紙芝居へ(58,588)
会合費	15,045	6,000	9,045	運営委員会(3回)
事務費	63,411	15,000	48,411	インクカートリッジ、ラベル外
雑費	14,410	16,000	△ 1,590	ピウスツキ忌式花11,165、木村和保氏弔電3,245
予備費	0	521,320	△ 521,320	
小計	467,439	887,320	△ 419,881	
次年度繰越金	445,896	0	445,896	
合計	913,335	887,320	26,015	

○特別会計

【紙芝居】

(単位:円)

	収入の部	支出の部	備考
助成金	50,000		ポーランド広報文化センター
一般会計より	58,588		
製作費		108,588	印刷(105,288)、裁断(3,300)
合計	108,588	108,588	

【ポーランド・アイヌ祖霊祭】

(単位:円)

	収入の部	支出の部	備考
助成金	154,154		ポーランド広報文化センター(10万)、ピウスツキ博物館(54,154)
開催経費		150,000	出演料(林家とんでん平 5万、アマレヤ劇団 10万)
一般会計へ		4,154	残余金
合計	154,154	154,154	

【三菱UFJ銀行からの寄付によるプロジェクト(MUFG)】

(単位：円)

	収入の部	支出の部	備 考
寄付金	500,000		三菱UFJ銀行より
一般会計より	1,190		
講演会開催経費		167,911	会場費(12,500)、講師外旅費・謝礼・原稿料(129,515)、チラシ・報告書印
図書・映像ソフト		278,359	ポーランド・アイヌ関係図書(124,635)、ポーランド映画ソフト(72,724)、
購入費			アイヌ関係映像ソフト(81,000)、
その他		54,920	消耗品(6,159)、郵送料(48,761)
合 計	501,190	501,190	

【創立35周年記念演奏会】

(単位：円)

	収入の部	支出の部	備 考
チケット売上	719,632		出演者(36万)、伴奏者(8万)、運営委員・会員(122千)、当日(46千)、プレイガイド(12万-手数料8,368)
助成金・広告料・寄付	200,000		道銀文化財団(4万)、ポーランド広報文化センター(5万)、札幌市民芸術祭事務局(8万)、カワイ楽器(1万)、ヤマハミュージック(1万)、寄付1名(1万)
交通費		207,000	出演者・講演者・舞台監督(11千×17人)、挨拶者・譜めくり(5千×4人)
会場使用料		200,305	舞台技術料・レセプション料(82,765)、施設+小リハーサル室使用料(29,300)、物件使用料(88,240)
ピアノ調律料		60,500	スタインウェイ2台+立会料
印刷費		64,400	チラシ6,000・チケット700・プログラム500印刷(32,070)、チラシ・チケット・プログラムデザイン(32,330)
その他		119,454	通信費(14,414)、雑費(10,440)、撮影記録費(30,000)、会議費(18,600)、打ち上げ補助(46,000)
演奏部会基金へ		267,973	
合 計	919,632	919,632	

【演奏部会基金】

(単位：円)

	収入の部	支出の部	備 考
前期繰越金	0		
特別会計より	267,973		特) 創立35周年記念演奏会
合 計	267,973	0	

会計の監査にあたり、関係書類及び通帳を照合した結果、適正に処理されていることを確認しましたのでここに報告しま

2023年9月27日 監査委員 嵩文彦 印

2023年9月27日 監査委員 稲川和幸 印

2024年度 収支予算案 (自2023年9月1日～至2024年8月31日)

(単位：円)

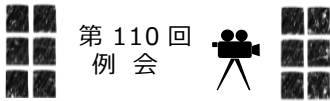
【収入の部】	予 算	前年度決算	増 減	22年度決算	備 考
会費	229,500	256,000	△ 26,500	245,500	3千円×90人×85%
寄付金	50,000	64,860	△ 14,860	58,000	
雑収入	4	4,159	△ 4,155	5	貯金利子
小 計	279,504	325,019	△ 45,515	303,505	
前年度繰越金	445,896	588,316	△ 142,420	511,432	
合 計	725,400	913,335	△ 187,935	814,937	
【支出の部】					
事業費	100,000	123,429	△ 23,429	72,885	37総会4万、例会4回×1.5万
連絡費	55,000	107,201	△ 52,201	51,678	ポーレ発送等(2.5万×2号)、その他5千
編集費	70,000	143,943	△ 73,943	68,548	ポーレ(2万×2号)、チラシ・配布資料等3万
会合費	28,000	15,045	12,955	4,368	運営委員会 (7千×4回)
事務費	38,000	63,411	△ 25,411	13,124	用紙、文具、コピー、プリンターインク外
雑費	15,000	14,410	590	16,018	HP経費外
予備費	419,400	0	419,400	0	
小 計	725,400	467,439	257,961	226,621	
次年度繰越金	0	445,896	△ 445,896	588,316	
合 計	725,400	913,335	△ 187,935	814,937	

○特別会計

【108例会】 午後のポエジア2023.10.15 (助成金 予定) 50,000 ポーランド広報文化センター

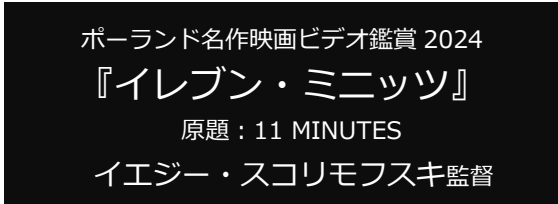
【109例会】 トークショー「カティンの森のヤニナ」2023.11.05 (助成金 予定) 50,000 ポーランド広報文

【演奏部会基金】 前年度繰越金 267,973



第110回
例会

カンヌ、ベネチア、ベルリン
三大国際映画主要賞を制覇
映画表現の新たな地平を
切り開くポーランドの巨匠



2015年 | 81分 | ポーランド・アイルランド



2024. 3. 9 (土) 18:30~20:30 (予定) 札幌エルプラザ 4F 中研修室 (北8西3) 入場無料

【お話】坂尻昌平氏 & 交流会

(さかじり・まさひら) 映画研究者。早稲田大学大学院文学研究科に学ぶ。共編著『ジャック・タチ』(エクスクワイアマガジンジャパン、1999)、『ジャック・タチの映画宇宙』(同、2003)、『世界映画大事典』(日本図書センター、2008)、『淡島千景~女優というプリズム』(青弓社、2009)、『渋谷実~巨匠にして異端』(水声社、2020)

予約推奨 (安藤) 080-4071-0956、hokkaidopolandca@gmail.com

会員動向 (2023.9~12)

入会: 赤木道子、井手裕彦、建部奈津子、齊藤賢人、齊藤美佳、三田剛己
退会: 新井藤子、野村信史、松山愛羅、松山莞太、松山敏 (敬称略)

ご寄付 (2023.8~12) 深謝!

(1口千円) (10) 霜田英磨 (5) 引田秋生 (3) 菅原三栄子 (2) 安藤厚、安藤瞬、安藤むつみ、今昇、齊藤賢人、齊藤美佳、村田雄穂、山本伸一 (1) 長田佳宏、北口久雄、小林浩子、野村信史 (順不同)

年会費 (2023.9~2024.8) 納入のお願い

年会費: 一般3,000円、学生1,500円
また、維持会費としてご寄付(1口千円:任意)も承ります

- ◆ゆうちょ銀行振替口座 記号 02740 5 番号 19735 加入者名 北海道ポーランド文化協会 (他銀行から送金の場合)店番(279)預金種目(当座)店名(二七九[ニナナキユウ]店)口座番号(0019735)
- ※ご請求額は個別の納入依頼(振替用紙同封)をご覧ください
- ※遠方の方はご寄付(年千円)で会誌 POLE の定期読者になることもできます。事務局にお問合せください

寄稿募集

本誌への寄稿を募集します。〆切は毎年3月末/7月末/11月末、分量は1000~1500字程度、テーマ、ジャンルは自由です。詳細は下記事務局の電話・メールへお問合せください

POLE111 目次

〈報告〉第12回午後のポエジアに参加して(林祥史)..... 1

〈報告〉第109回例会 特別講演会『カティンの森のヤニナ~独ソ戦の闇に消えた女性飛行士』トークショーを終えて/『カティンの森のヤニナ』を読んで(小林文乃、富田武、園部真幸)..... 2

〈新刊紹介〉井手裕彦著『命の嘆願書』(井手裕彦、富田武)..... 4

〈新会員のひとこと〉シベリア抑留から、ポーランドの歴史へ(建部奈津子)/お恥ずかしながら、(三田剛己)/ポーランドのことをもっと学びたい(齊藤賢人)/美味しい料理と子供が安心して遊べる場所(齊藤美佳)..... 6

〈新刊紹介〉菅原未栄詩集『櫻橋』(小篠真琴)..... 8

アートマウムから、詩の朗読へ(木内ゆか)/映画『戦場のピアニスト』@シアターキノ..... 9

シンボルスカ生誕百年の深い感慨と感謝(長屋のり子)/映画『Ainu ひと』上映..... 10

日本に於けるショパンの受容について(2)(川染雅嗣)/講演会「カティンの森事件とシベリア抑留」..... 11

「ポーランドダンスの祭典2023in 北海道」について(今井裕美)/ワルシャワ蜂起博物館展覧会..... 12

第37回定例総会議事録..... 13

〈第110回例会〉ポーランド名作映画鑑賞&交流2024~J・スコリモフスキ監督『イレブン・ミニッツ』..... 16

	発行 北海道ポーランド文化協会	ポーレ編集委員会
	〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤方 TEL・FAX 011-556-8834、hokkaidopolandca@gmail.com	安藤厚/池田光良 氏間多伊子/熊谷敬子
	東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付 TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058	

POLE no.111 (January 2024)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Report: Participating in the 12 th “Afternoon Poesia” (Y. Hayashi)	1
Report: Special lectures about the book “Yanina Lewandowska of the Katyn Forest: A Female Aviator Who Disappeared in the Darkness of the German-Soviet War” on 05/11/2023 & Book review (A. Kobayashi, T. Tomita, M. Sonobe)	2
Book Review: “Petition for Life: Following the untold stories of Japanese interned in Mongolia and Siberia” by H. Ide (H. Ide, T. Tomita)	4
New members’ messages: From Siberian internment to Polish history (N. Tatebe), My embarrassment (T. Mita), I want to learn more about Poland (M. Saito), Delicious food and a safe place for children to play (M. Saito)	6
Book Review: Sugawara Mie poetry collection “Sakura Bridge” (M. Koshino)	8
From Polish art mime to poetry reading (Y. Kiuchi), Screening of Roman Polanski's film "The Pianist" at Theater Kino	9
Deep emotion and gratitude on the 100 th anniversary of the birth of Wisława Szymborska (N. Nagaya), Screenings of the film “Ainu – Indigenous People from Japan” (2019) directed by Naomi Mizoguchi	10
Reception of F. Chopin in Japan (2) (M. Kawasome), Lectures “Katyn Forest Massacre and Siberian Internment”	11
About “Polish Dance Festival 2023 in Hokkaido” (H. Imai), Warsaw Uprising Museum Exhibition, August 2024, Sapporo	12
Records of the 37 th Annual meeting	13
Screenings of the film “11 Minutes” directed by J. Skolimowski	16